みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

紀行 : すべての道はローマに通ず? : 移民・越境・ヴァチカン

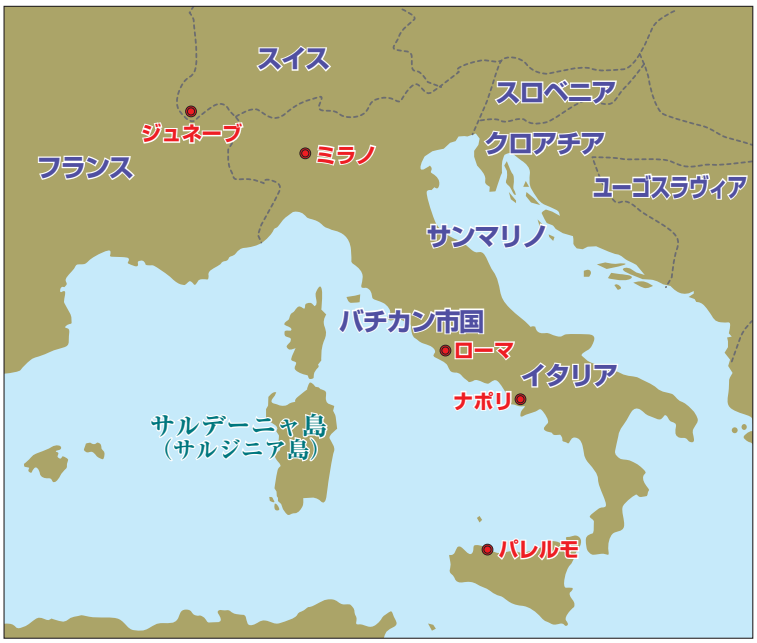
メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5247

紀行

すべての道はローマに通ず？

～移民・越境・ヴァチカン～

文・写真　陳　天璽



ヴァチカンのサン・ピエトロ広場

越境しながら

2005年3月末より10カ月間、私は文部科学省の在外研究員として、「グローバル化社会におけるボーダーと移住・移動者、無国籍者の研究」をテーマに、ヨーロッパにて研究をおこなう機会を与えていただいた。ボーダーと移動する人々や無国籍者に関する調査を、ヨーロッパでおこなおうと思ったのは、通貨の統一や域内移動の自由化が実現し、国境や国籍などボーダーの意味が変容している欧州連合（EU）でなら、新しい動向がつかめるだろうと思ったためだ。

今回の調査は、移動する人たちを研究対象にしている。自分も同じように、ローマ、ジュネーブ、オランダと拠点を転々としながら調査するというスケジュールを立てた。そのため、行く先々での宿探しや仕事場のアレンジなど、だいぶ苦労しているが、一方で「移動する人たちも、こんな不安な気持ちを抱えながら日々暮らしているのかなあ」と、彼らの思いを想像したり、体感できたりして、私にとっては勉強になる面も多々ある。

そんな研究調査の1駅目はローマ。ローマに住んでいる間、仕事場へ通うため、私は毎日国境を越えていた。というのも、教皇庁移住・移動者司牧評議会というヴァチカン領内にあるオフィスに通っていたためだ。ヴァチカンは周知の通り、独立国家のひとつである。

ヴァチカンとローマの境界

毎日、イタリアとヴァチカンのボーダーを越える際、パスポートを提示する代わりに、笑顔で「チャオ」と挨拶をすると、愛想の良いお兄さんがウィンクを合図に通してくれた。ヴァチカンへと一歩踏み入れると、商売っ気のあるローマの下町とはうって変わって、厳粛な雰囲気に包まれるのだった。

移動する人たちへのケア

私がお世話になっていた教皇庁移住・移動者司牧評議会は、世界各地の関連機関や教会、非政府組織などと連携し情報交換をおこない、また会合や各種活動を通じて、移住・移動者の人権、そして生活が守られるよう各政府・機関に働きかけている。現在、世界には1億7500万人の移民がいるといわれているが、ほとんどの国では、人種差別、排外主義、ナショナリズムが横行し、移民や移動する人たちへの配慮が欠けている。そのため、同評議会は、国家の枠組みを越えた視点と立場から、移民・移住者への援助をおこなっている。

具体的には、難民、亡命者の人権擁護、移民、移住者の保護、ロマ（流浪の民、かつてジプシーと言われていた人々）、船員や空、海の交通機関勤務者などのケア、また、巡礼者、留学生など祖国や母国、家族を離れて海外に移動している人びとへの精神的ケアをおこなっている。

評議会で働くポーランド人のシスターとロマの子どもたち

同評議会は、議長を務める日本人の濱尾文郎枢機卿のもと、総勢20余名の職員（おもに司祭や信徒）が働いており、その国籍は12カ国にも及ぶ。移民、難民、留学生、旅行者、船舶関係者、国際航空関係者、道路関係者、ロマ、サーカス・遊園地関係者と、移住・移動者を大きく9つのグループに分類し、セクションごとに専門の担当官が仕事にあたっている。各地からさまざまなニュースが入ると、担当官たちは世界各地にある教会とのネットワークをとおして、諸問題に対処するよう働きかけている。

世界の移住・移動者の問題に携わっているため事務所での仕事はもちろん、さまざまな出身の職員たちが集まっているオフィス内の雰囲気は、まさに多民族多文化である。ある意味、職員それぞれが移動や移住を自ら体験しており、また異文化への理解や受容を心得ているため、同評議会が携わっている問題への対応にも冷静かつ親身である。

世界一小さな独立国家

ヴァチカンは、ローマ・カトリック教会の総本山としての宗教組織上の面と、国際的な国家の面をもつ。一般的には「ヴァチカン」の名で広く知られているが、それは主として領土を指し、国家として正式には「教皇庁(The Holy See)」という名称がある。自立した立法、司法、行政権をもち、174カ国と外

交関係を結んでいる。国務省、教理省をはじめとする7つの省、3つの裁判所、11の評議会から構成され、運営されている。

ヴァチカン城壁内の敷地は0.44ヘクタール、住民は約800人で、ヴァチカン市民権をもつ人は552人いるそうだ。おもに枢機卿や聖職者、そしてヴァチカンの警備にあたっているスイス衛兵などである[1)]。独自の郵便制度をもっており。また日刊紙「オッセルヴァトーレ・ローマ」の発行、数カ国語の週刊誌、そして35の言語によるラジオ・ヴァチカン放送を通じて、全世界のローマ・カトリック教会とつながっている。

私がローマにいる間、ヴァチカンでは大きな歴史的な出来事が起こった。2005年4月2日、教皇ヨハネ・パウロ二世が亡くなられたのだ。街一帯には不幸を知らせる重い鐘の音が響きわたり、サン・ピエトロ広場には悲しみ喘ぐ人びとが集まった。ローマのテレビや新聞雑誌も、しばらくヨハネ・パウロ二世の話題一色だった。

葬儀がおこなわれた4月8日、ローマ一帯は交通規制がしかれ私用の車はすべて通行止めとなった。学校や公的機関をはじめ、多くの会社は休みとなり、町はすっかり静まりかえっていた。違う国とはいえ、ローマとヴァチカンの切っても切れない関係を目の当たりにした。

葬儀には、アメリカのブッシュ大統領やフランスのシラク大統領など外交関係をもつ各国の政府代表者たちがたくさん参列していた。また、世界中から続々とカトリック信者や一般の人たちが追悼のためヴァチカンに赴いた。まだ生後20日の赤ちゃんを連れて、ポーランドからバスで越境してきたという女性もいれば、ヨーロッパからだけではなく、アフリカやアジアからの人たちの姿も見られた。

その後、4月18日からは法王選挙会（コンクラーベ）がシスティーナ礼拝堂でおこなわれ、115人の枢機卿が世界中から集まった。枢機卿（Cardinal）は教皇の最高顧問であり、重要な案件について教皇を直接補佐する枢機卿団を構成すると同時に、個々の枢機卿は教会全体にかかわる日常的な職務について教皇を助けている。濱尾文郎枢機卿も、コンクラーベに出席していたが、4月は教皇の一件で特に忙しくされていた。

この一連の出来事があった時、ちょうどローマに居合わせた私は、独特の国家像をもつヴァチカンの存在に、ますます興味をもつようになった。「どこが国境か」、「人々はどんな認識をもっているのだろう」など、いろいろな疑問を抱きながら私は毎日のようにヴァチカンを訪れた。サン・ピエトロ広場を描く円のように、ヴァチカンとローマの間に引かれている「国境線」や、広場周辺にある駐教皇庁大使館でなびいているブラジルや中華民国など各国の国旗を眺めていた。ローマの人たちも、「ヴァチカンは違う国。買える薬も違えば、休日も違う。でも、いつもそばにあるからローマの一部のような気もする」と一言では語りつくせないようだ。

中華民国、台湾の大使館の旗

駅前にいるロマの家族

ローマにおける移動者たち

そんなローマの人たちにとって、ヴァチカンだけではなく、周辺のヨーロッパ諸国との関係も、どんどん曖昧になってきている。リラからユーロへと通貨が統一されたり、EU域内での移動が自由化されてから、国の境のあいまい性がより急速に浸透している。特に、移動者が多く集まる都市部ローマには東欧をはじめ、中近東やアジア、アフリカから毎日のように移民や難民、そして非正規移民が入ってきている。

イタリアはかつて多くの移民を送り出して

きた国であった。他の北部の先進諸国と比べ国境管理が比較的緩い面があるという。地理的にみてもイタリアは長い海岸線をもっており、南からの不法入国を防ぐことは難しく、東欧や中近東などとも近いためアクセスポイントとなりやすい。移住・移動者たちは、いったんイタリアに入れば、EU域内の他の国々へは容易に移動できるため、まずはイタリアをめざすようだ。

街を歩いていても、それは一目瞭然である。道端で露天商をしているアフリカ系やインド系の人、そしてテルミニ（中央駅）付近に広がるチャイナタウンなどで移住・移動者、そして非正規滞在の人たちを見かけることは多い。サングラスやアクセサリーなどの商品を入れたボストンバックひとつと、商品を並べるダンボール箱だけを商売道具に生計を立てている。

商売をしている人たちのほか、私がとくに関心をもったのは、ロマの人たちである。私が住んでいたティブルティーナは交通のハブ地帯でもあるため、労働者や新しく来た移住・移動者の人たちが多く集まるところであった。電話屋が数多くあり、移住・移動者たちが出入りしていた。電話屋の各ボックスから国境を越えた故郷にいる家族たちに連絡をし、安否を確認しては一喜一憂する人びとを多く見かけた。ガラス越しにロシア語や東欧の言葉を耳にすることが多かった。

いつしか常連客となっていた私は、すっかり電話屋のバングラデッシュ人のお兄さんと仲良くなった。彼自身ロシア、モルジブ、ポーランドなどへ数カ月ごとに出稼ぎに出ていたそうだ。イタリアは5カ国目で、もう7年間在住している。ペルメソ（居住許可）も取得したので、ヨーロッパ内は自由に移動できている。彼によれば、最近ローマにはルーマニアからの人が増えたそうだ。

ルーマニアから来た人のなかには、ロマの人たちが多い。評議会のロマを担当しているポーランド出身のシスターによると、元をたどれば彼らはインドに起源をもつそうだ。インドからヨーロッパに拡散し、ハンガリー、ルーマニアなどに多く留まった。東欧では定住するように強制されたため、いまではルーマニア、ハンガリーから来た者が多い。

ロマの人びとは天性移動を好み、キャラバンなどキャンピングカーで移動しながら生活しているそうだ。もちろん家を持っている人もいるが、しばらくすると家を空けて周遊するそうだ。

ルーマニアから来たアコーディオン弾き

男性は町の広場や乗り物でアコーディオンやギターなどの楽器を担いで演奏しては、横についている子どもたちが人びとにチップをねだる。また、女性はしばしば赤ちゃんをつれ、駅の階段や町の一角で物乞いをしている。その日の稼ぎで、パンを買ってはピクルスをつまみに食べているロマたちをよく見かけた。

ある日、仕事のあと、トラステーベレにあるカフェで本を読んでいたとき、またいつものように、中年の男性がひとりで楽器を弾き歌い始めた。数曲歌った後、真っ先に私のところに来たので、少しチップをわたすと喜んで片言の英語とイタリア語で話しはじめた。

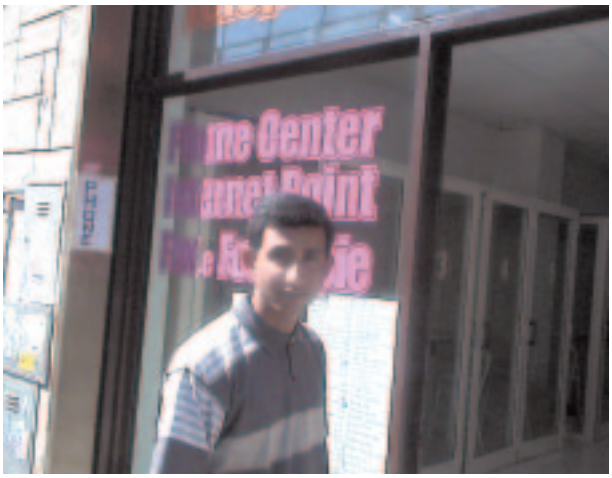
「どちらからですか？　私はルーマニアからです。」

自分が日本から来た中国系だと伝え、そして彼に「何年イタリアに住んでいるのか」とイタリア語で聞くと。

「ノー、ノー」と言いながら人差し指をあちこちに指すようにした。イタリア語はあまり上手ではないようで、転々と暮らしているということを表したかったようだ。

彼らのように移動をしつづけることを生活の常としている人びとからすると、国家とか国境とかはどんな存在なのであろう。国籍や身分の証明などはどうしているのだろう？　そんな興味が、ローマという国の境があいまいなところに身をおく私のなかにまたひろがってきた。

注1
Holy See Press Office, “Vatican Citizenship,”
www.vatican.va/news_serveoce/press/documentazione


移民たちが利用する電話屋で働くバングラデッシュ人

ちん てんじ

先端人類科学研究部助教授。
移動・移住者と、国籍、国境、グローバル社会のダイナミズムを研究。
主な著書に『無国籍』（新潮社、2005年）、『華人ディアスポラ』（明石書店、2001年）などがある。